**福澤　公伯 （ふくざわ・こうはく）**

**１、プロフィール**

夢見がちな少年の世界を歌い続けた詩人。同人誌「狐裘」や第二次「飾画」の編集にあたった。本づくりが好きで、編集活字や組み方、装丁等にも才能を発揮した。

＜生没＞

1951（昭和26）年３月12日～1999（平成11）年３月24日

＜代表作＞

『青磁色の刻限で』『妖精の輪の中から』『白磁・白亜・風の夢』『幻の鰐伝説』『夏の終りの薔薇』『恢後期』

＜青森との関わり＞

弘前市土手町27の食料品店を営む父福澤平吉（へいきち）と母壽代（ひさよ）・旧姓清野）の長男として誕生。弘前市専求院の墓地に眠る。

**２、作家解説**

弘前大学附属小学校、同附属中学校、青森県立弘前南高等学校卒業。よく友と遊びギターを弾く快活な少年で文学面の活動はないが、母方の叔父は歌人清野利保で後年の影響がある。家業を継ぐため専修大学商学部に入学したが中退、早稲田大学文学部の聴講生となった。ロックバンドで演奏し外国の曲に詞を作り、絵画に親しみ吉本隆明に傾倒し、この時代の軌跡が、帰郷後の詩人福澤公伯を形成した。

第１詩集『青磁色の刻限で』（昭和50年発行）の著者として帰郷して公伯は、幼なじみの三上勉が予想した音楽家でなく詩人になっていた。老舗（しにせ）である食料品店の生家に「狐裘舎」（こきゅうしゃ）を置き、三上勉らと同人誌「狐裘」（狐のわきの白毛皮で作ったかわごろも、貴重品の意）を発刊したのは、昭和53年（1978）年６月である。公伯29歳、「狐裘」同人の工藤美栄子と結婚し、のち長男玄伯（はじめ）を得た。昭和56（1981）年「狐裘」は６号で休刊した。同59（1984）年、「狐裘」と「飾画」（かざりえ、内海康也主宰、昭和51刊～同53年休刊）が合併し第２次「飾画」として公伯が編集にあたった。２人の共著としてソネット詩集『花燃え』が出る。同63年第25号をもって、公伯は見解の相違で「飾画」を離れた。

店の奥のどっしりした机で作品を書き思索し、中原中也や立原道造に親しみ柳田國男・夏目漱石を愛読した。1993（平成５）年６月から、陸奥新報社の「文芸時評」を12回担当し、鋭くえぐった詩人らしい見方の独特な時評で難解な一面もあった。

外国の現代文学や音楽を愛し、大いに酒を好んで詩を論じた。自作の詩を何度も編集し直して完本化を図った。経済性を度外視した繊細さは、公伯の特徴だった。ペンネームは清野道夫の他にも多い。賞には無縁だったが、その生きかたを知る人は、公伯の生活の前を常に詩が歩いていたと異口同音に言う。

公伯は、アーニャへの執着した愛、夢見がちな少年の世界を歌い続けた。詩作のことばざわりは優しく長文である。越えるべきことばの深淵を主張せず、現代詩のジャンルを重大視しなかった。「火祭り」「わが鰐伝説へ」「未来のイブ」に詩的人生が存し、第五詩集『恢復期』に生活感がにじむが、死期が近づいていた。刊行予定の完本『福澤公伯全詩集』全四冊組は成らなかった。